二人のアンコ

豊川信雄

ダダダと階段をかけおりる音、ゴホンゴホン、くそカゼでも引いたんかいな、アーグガーガー、とウガイしている音が洗面所から聞こえる。威勢良くぱたんと戸を閉めてガチャと鍵でも掛けるような音も聞こえてくる。

安ドヤの朝は騒々しい、通称松ちゃんも周りの音で目をさした。時計を見るともう六時前だった。寝すごしてしまったと思いながらそそくさと所定の事をすませ、センターへ急いだ。

松ちゃんは年はまだ三十二だが、労務者稼業十年のベテランである。景気のよい時は直行へいって高給貰って良い暮しをしていたようだが、景気悪くなってからは直行も少なくなり、とうとうひろい仕事をしなければならない本当のアンコになってしまった。だが、その時分はまだ二、三の親方や仲間とも通じていたので「明日コンクリ打で人手が要るんや来てくれんか?」とか「ずっと来てたんが休んでいるんや、三日ばかり手伝ってくれへんか?」とか時折り声をかけてくれこった。だけどそれも段々減り、ひろい仕事の良いのも滅多にいけんようになり、そうなったらケタオチの人夫出しか飯場へ行かねばならんようになった。

土方稼業に入って二、三年は人夫出しもよく行ったが、今じゃ直行口づての良い所を行ってきてるし、今さら桁荒なんか行けるかとの気持が強く、人夫出しの車には乗る気にならなかった。

飯場だったら五千円の日当なら現金で七千円貰っているのと同じ位金は残せるだろうと考え、それからは飯場を多く行くようにし現金はつなぎで行く事に決めていた。

この日も飯場から帰って五日になるけどまだいくらか金は持っていたし、失業の認定も受けられるので、良い所があったら行ってもいいとの気持だった。また正月も近いので今度行く所は正月までずっといられる所行かねばならんので良く選んで行こうと決めていた。

一応端から端まで見て歩いた。相変らず桁荒が三、四ケ

所来ている程で仮場も五千円が最高だった。喰抜きだったら行ってもいいと思ったが仮代引かれると分ったので行く気にならなかった。よし今日はあきらめて明日は五時に起きて出てきてみる事にしようと決めた。そして前に付合っていた親方や仲間が寄る所へ行ってみる事にした。

一番親しく付合っていた仲間が一人いた。通称石やんと呼ばれていて年は松ちゃんより三つ上である。

「よーお、久し振りやなあ、今度どこ行ってたんや、だいぶ稼いできたやろう、少し回してくれやあ」石やんは気安く冗談気味に話してきた。

「もう帰ってきてから五日もなるんでオケラや、それよりか正月も近いけど仕事はどないや。行きたい時行けるけ？」

「まあ、行けたり行けなんだりやけど、おやじに前の日に明日の事を聞くようにしているんで、無いとなったらそれなりの段取りをしているんで困る事ないわ。正月前忙しくなりそうや言うてたから正月も心配ないと思うわ。そやけど相変らずギャンブルの方の見通しが仲々たたんのでその点で困るんや」

石やんもこの道十年選手で頭も良く度胸もある方だけどずっと土方ばかりやっている。今の自分には土方の方が気楽でいいとの考えでやっているから、職人から馬鹿にされるようなこととされたら徹底的に文句言うようにしている。松ちゃんも、どんな稼業をしていても誰からも馬鹿にされずに度胸を持って生きていけるという事を石やんから学んだ一人である。

以前一緒に行った所で職人が文句言ってきた。「おい早よう運ばんかい！そんなもん二本ずつ持ってるやろう、もたもたしたらあかんど！」石やんはすかさず反発した。

「そりゃ二本持てんことはないけどあんなにぎょうさんあるのに二本ずつ持ってたらしまいに体へばってしまうやないかい、どうしても早よう運んで欲しいんやったら人数増すか、それともあんたも一緒に運んだらどないや。こっちはこれで普通にやってるんや、もたもたなんかしてへんぞ！文句ぬかすな－」

だが職人も面子があるからこのまま引込んではいない。

「なにお！おまえらわしに逆うけ！世話役呼んでくるけんとこおれよお！」血相変えて世話役の所へ行きよった。

しばらくして世話役が来て二人をたしなめた。「おまえら職人に逆らったらあかんやないけ！」石やんは世話役の顔を立てるつもりで何もいわなかった。

「まあいい、ここはほかの者にやって貰うからおまえら別の仕事やれや」世話役はうるさく言わなかった。もっとも一応筋の通った事に関しては世話役たりとも文句の言えんのは当然であろう。むしろこの場合石やんの方が世話役の方に文句の言える道理にあるはずである。土方や雑役工はその仕事の本筋の範囲内でやっていけるような心がまえで仕事するなら、本当に気楽な稼業であるはずだ。ほとんど責任を持たんでやれるし、給料が安いからのんきに運動している程度に励いていればいいのだ。二人以上の場合はなるべく話でもしながら働くようにした方がよいだろう。そしたら時間のたつのも早いし頭の運動にもなるというものだ。話をするのが嫌だったら空想事をするなり、考え事をするなり、鼻唄を歌うなりしながら働くという風にとにかく気持良くのんきに働くことだ。

このようにのんきに働くのをとがめる者がいたら土方や雑役工の言分を持ってしていくらでも文句の言いようがあるはずだ。

松ちゃんも石やんもアンコになりたての頃はむこうのいいなりになって嫌な思いしながらやっていた時もあったが、今じゃ土方としての言分を通してのんきにやっているので土方や雑役でも苦にせず、むしろ楽しみながらやっているようだ。

だがこれは人夫出しやケタオチの一見の安い所に行った場合で、常傭になり直行で行く場合とか、値の良い所へ行った場合はこっちの言分ばかし通すわけにはいかないのはいた仕方ないことかもしれない。

「そりゃ、もう帰ってから五日もなるんけ。けどおけらやいうてもいくらか持っているやろう、どや今日は俺も行くあてないし、休んだって困らんだけの金は持っているし、パチンコ打ったり競輪張ったりして過ごそうやないかい、お前がこの前帰って来た時は面倒みて貰ったけんな、今日は俺が面倒みたるわ」

「そうやなあ、今日はもういい厩場来んだろうからあんたに面倒みて貰う事にするか」

松ちゃんは気軽に石やんに甘えることにした。

「お前は朝は酒飲まんかったなあ」

松ちゃんは飲んだら顔に出る方でビール一本か酒一合位しか飲めんので晩でなければ飲まんようにしている。

「俺は夕べ飲み過ぎたんでこれからコーヒ屋にでもいってお前の好きなコーヒーでも飲みながら競輪の予想でもするか」

このところアンコもコーヒー飲む人が増えているが、店も多くなったので客の少ないゆっくりできる店に入る事にした。わりと大きい店でまだ空席が十ばかりあったのでここならゆっくりおれると思った。

濃いコーヒーが運ばれてきた。香り高いコーヒーを一口飲んで石やんは「ああ美味しい」と言い顔をほころばせながら話を聞いた。

「今度の仕事はどないやった。よかったけ？土方としての言分を通して気楽にいけたけ？」

「まあ、いい方でもかかったけど流は悪そうな所へは行かんようにしているんで、悪くもないまあ普通といっ・・たところやった。日当が唾抜きの五千円やったから仕事はあんまり気楽にやれんかったが、別に変な思いもせんかったわ。あんたもたまには気晴行くようにした方がいいんじゃないか。現金やったらちょいちょい休む事もあるだろうし、まとまった金握れんやろう」

「そうやなあ、仕事も悪くないみたいやけど、嫌な思いせんで働けるように親父ぶ気くばってくれてるみたいやから、今のとこ行ける間は頑張行かんつもりや。まあいずれ頑張も行かなならんようになるやろからその時は頼たぜ。飯場に関してはお前の方が先輩やけんな」石やんは軽く笑ってタバコに火を付けた。

「ところで話変わるけど、俺は二、三年前から人夫出しや一見の所行った時なんか、たまにやけど「おっさん」とか「おっちゃん」とか呼ばれる場合がある。最近考えてみると、三十代でそんな呼び方されるのは馬鹿にされてんのやないかと思うんや。それで今度そんな呼び方されたら文句いおう思って一応文句の言い方を段取りしてから一見の所行ったんや。そしたらあんのじょう、現場のポーシンみたいなやつが「おっさん」と呼んできよった。俺はここぞとばかりにじゃかすか文句言うてやった。

「俺はまだおっさんと違うぞーいくらアンコだからって人を馬鹿にした呼び方すな！こっちは好きでこの職業やってんだ。あんたからおっさん呼ばわりされる筋合はないんやど！この野郎！」ふいをついた形で俺が怒鳴ったんで相手は驚いた様子でしばしアゼンとしておったが、気を取り直して俺に負けない大きな声で怒鳴り返してきよった。「何お－！この野郎とは何だ－！こらあ－！ほんならおまえおっさんでなかったら兄ちゃんかい－！年はもう三十越してるやろ－！四十位なるんと違うんかい－！四十にはならんにしても三十過ぎたらもうこの世界じゃおっさんじゃ－！文句抜かさず早よう仕事にかかれ－！」言うてにらみつけよった。けど俺もこのまま引き下る訳にはいかんので言い返してやった。「人の年を勝手に決め付けるな－！俺はまだ三十五じゃ－！それは三十過ぎたらおっさんやと－！勝手ぬかすな－！それは言の事じゃ－！今じゃ人間の寿命ものびてるんで四十になったって兄ちゃん呼ばれたっておかしくないはずじゃ－！人生の半分もとん内か

らおっさん呼ばわりされてたまるか。あんたが兄ちゃんかおっさんしか呼び方知らんのやったら、兄ちゃん呼んで欲しいわ。これからは人をよく見てからおっさん呼ぶようにしろ」

こんな具合に俺も目一ぱい怒鳴ってやった。

うなずきながら聞いていた松ちゃんは「あんたは相変らず仲々やるなあ。一見のアンコにそんなにまで言われたんじゃ相手もまだそのまま引き下らんかったろう？」

「そうや相手もポーシンとしての面子があるけんな、相当怒った顔して怒鳴ってきよったぜ「おまえは文句言いに来たんかい！仕事しに来たんかい！どっちや！あん，まりつべこべ抜かしたらあかんぞ－わしはこれまでおまえ位の年以上の者には皆おっちゃんで通してるんや！仕事やる気ないんやったら帰れ！」ぬかしよった。それで俺は「ほお、仕事せんで帰してくれるけ、有難い事じゃ、ほんなら日当くれや、帰ってやるけん」と言おうかと思ったけど、元々が大した事ではない言い争いなので、ことは俺が一歩引く事にして「いやあ仕事やる気はありませ、ただ俺はおっさん呼ばわりされるのが嫌なけん腹立てたまでや、とにかく頼むけん俺にはおっさん呼んでおくれ、別に兄ちゃん呼ばんでもいいけん〃おい〃とか〃よー〃とかいうふうに呼んでおくれ、それなら仕事させて貰いましょうか」と言うて俺は仕事やる気有るというふうにもっていったんや、相手はまだ気持おさまらん様子で「生意気ぬかすな！仕事やる気があるんやったら早よう仕事せ－！」言うてそれ以上いわなんだんで後はもういざこざなしで時間まで所定通りのんびりやって帰ってきたんや。おまえはまだ俺よりか若いし、又若く見えるしおっさん呼ばれた事ないやろう」

「いや、それがあるんや、やっぱりそういう時は文句言わなならんな」

「そうや、俺はこれから先、最底五年はおっさん呼ばわりされたらどんな相手であろうとも文句言うてやるつもりや、相手によっちゃケンカになり、血を見る事になるかもしれんけど、それは覚悟の上じゃ」。石やんは興奮気味に意気込んでまくしたてた。

「年とるのは早いもんやなあ、俺も年明けで五月六日が来たら三十三か、しかしあんたの言う通り四十過ぎまではおっさん呼ばわりされたくないなあ。これから先ひょっとしたら大金が転がり込むかして、幸運が向いて来たらアンコから足洗って嫁さん貰ってちゃんとした生活ができるかもしれないしなあ。まあお互いまだまだ望みをかなえられるかもしれんというもんじゃ。俺は四十までまだ八年もあるけんのんきなもんじゃ、その内なんと

んとかなるやろう」

松ちゃんは話をそらしぎみにわざと気楽に言った。

「幸運は勝手にこない、こっちからつかむよう努力をしなければならんとか言われてるやろう。おまえは所帯持ってちゃんとした生活がしたかったらもうのんびりしてられんやろう。そうや、おまえ型枠入れの仕事いくらか出来よったやないか。本腰入れて覚えて型枠大工になれや。そしたら所帯持って並の生活は出来るはずや。おまえは手先も器用やし、その腕やったら中習で行けるし一年もせんうちに立派な職人になれるはずや。中習で行ったかて土方よりか良い金貰えるやろうし、またそんな立派な腕を持っていながら土方してるのは馬鹿らしいし、ひょっとしたら罰があたるかもしれんというもんや。どうや型枠大工になった方がいいと思わんか？」

「そうやなあ、俺はまだまだ長いかもしれん人生をこのままアンコでずるずる過ごしている訳にはいかないと考えているから、あんたの言う通り職を身に付けるようにした方がいいみたいやなあ。型枠入れは今も飯場に行った時、職人と一緒にやらして貰ったりしているから、ある程度要領は分ってきたし、半年位で一応覚えきれるだろうと思っているから、年明けたら頑張るようにしてみるかなあ・・・。ところであんたは俺の事ばかり心配してくれているみたいやけど、自分はどないするんや」

「俺は無器用で土方しか出来んし、仕事もやる気ない方やから、まあ先々はギャンブルでやってくつもりや。そやけどギャンブルで家をつぶした者は居っても、家を建てた者はおらん言われているけんな、果してうまい具合にゆくかどうか分らんわなあ・・・。そうや話に夢中になり過ぎて予想するのを忘れておったなあ」

石やんはスポーツ紙をズボンの後ポケットから取り出し広げ、ギャンブル面を開いた。

「競輪とボートか、ボートは予め予想するのはむつかしいから競輪の予想をしてみるか。ところで腹減ったなあ。おまえもまだ朝飯食ってないやろう、焼ソバでも食うか」

石やんは松ちゃんの顔を見て同意してから焼ソバを注文した。松っちゃんは新聞を買ってなかったので、店のを借りて見る事にした。十分位して焼ソバが運ばれて来た。二人は美味そうに平らげた。

「七レースは狙い目みたいやなあ、九レースは穴や、何がくるかちょっと見当がつかん、おまえはどう思う？」

「言うやなあ、それに八レースも案外買い目かもしれんぞ」と松ちゃんは答えた。

ギャンブル歴も二人は同じ位だけど、石やんの方が勝負好きなせいもあり、また将来に事を託しているので、石やんの勝率の方が上だ　、石やんとてこれまでの勝負を平均してみると相当負けているのである。

「俺は最近ある本からヒントを得て、出目をあらゆる角度から見て次のレースにどう絡んでくるかを調べているんや。それが全着順の目から見なあかんので相当ややこしいのや。まだ調べている途中で分らんけど、ひょっとしたらあかんかもしれんけど、将来が掛っているんで一応調べてみるつもりや」

「色んな本が出回ってるみたいやけど、全部ごまかしだしなあ」

松ちゃんは、そんなもの調べたってしょうがないだろうという気持で言った。石やんは薄ら笑いを浮べただけで何も言わなかった。

「そりゃそうともう八時前やで、手帳出しに行こうや」

「競輕か、今日はやめとこう。俺一みんなは寒い中で仕事捜してるのに、わいらは温い所で気持良く過ごしてるんやし、こういう場合には認定受ける資格はないがなあ。まあ俺はあんたも知っての通り、正々堂々と生きるのが好きやから、けちな気持ではした金貰う気にならんのや。おまえもやめとけ、そのかわり俺が一万円やるけん」

石やんは、時たまそばから見たら馬鹿なやつだと思われても仕方ない変った言動をすることがある。

「ほーおう　あんたには今日はそんなに余裕があるんかい。一万もくれるんやったら、認定の金いらんわ」

これまでの付合で、一万くれるというのは冗談じゃないと分っているので松ちゃんは素直に貰う気持を示してイスに座り直した。

まあ、余裕が有る言うても三万ちょっとしかないけど、明日は仕事行ける手筈になってるけん、三千位残し、後全部使っても困らんてわけだ。ほんならこれで決ったとして、本腰入れて予想に取組むか」

また二人は新聞に見入り、各自の思惑を言いながら予想を立てていった。時間も九時を過ぎ、混みだしてきたので店を出ることにした。外は冷い風が吹いていたが、暖い所に長く居て、体も頭もほてっていたので心地良く感じられた。三十分ぐらい近店の品物を見ながら歩いた。それから腹ごしらえをして、目指すパチンコ店へ行った。もう開店間際だったので、店の周りは大勢の人が集っていた。二人はパチンコはへたで敗ける場合が多いから、遊びか暇つぶし程度にやるだけである。今日も千円負けたらやめようと決めていた。

盛大な軍艦マーチと共にドアが開き、みんな我れ先に

店内に突入した。大半の人はマークしていた台にマッチ等を置いて台を確保した。石やんはこと二、三日やってなかったが、松ちゃんは三日間やっていたので、出ていた台を五、六台覚えていたから石やんにもあらかじめそれらの台を教えておいたので、手分けして目指す台に走ったが、一瞬遅かった。五台はもうマッチが置かれていた。だが一台はまだ空いていたので素早く松ちゃんはマッチを置いた。石やんは仕方ないので所々に空いている台の釘を見かがら打っていくことにした。

三台目で上の皿一杯出た台に当ったが、遊びの台みたいだったので見切りをつけ、また選び替え切り替えして打っていったがとうとう駄目で一時間もしない内に千円負けてしまった。松ちゃんのは八百円目で安定して出る様になり、もう上下の皿共一杯詰まり引いた玉が箱にも半分溜っていた。

「おまえの台は本命やったなあ、粘ったら終了までいけるんと違うか？」

「久方振りにいい台当ったわ、この調子やったら終了までではどうか知らんけど土方の日当位は稼げそうや、そやけど、あんたは運が悪かったなあ」

「かまへん、おまえが勝ったらいいねん。所でもう今日はここで日当もいただく方がいいやろ、腰痛くなったかて敗ける場合が多いんやから、ここは温いし堅い儲で行った方が無難や」

「そうやなあそうさせて貰うわ。あんたから貰った一万円もう要らんけど、せっかく貰ったんやから半分だけ貰うとして半分返すわ、そして俺が貰う事にした五千円で六レースから3－5流しで買うてきて任しいんや」

松ちゃんは貰っていた聖徳太子を渡した。

「五千でええかあ、おまえは今日はツイてるんで3－6が穴で入るかもしれんぞ、楽しみにしてろや、ほんなら五時過ぎにここか店の前で会おう」

松ちゃんは煙草に火をつけ打ちだした。三十分程で箱一杯になったが後は横ばい状態が続いた。時間は一時間二時間とたっていったが、入るのよりかすっ込む方が多くなって、せっかく溜一杯出していた玉をまた半分程突込んでしまった。素人が勝つのは何と難しい事かと思いながら、今日は三日間で貯けた分を取戻したい、日当にしたいとの気持が強かったので、何とか粘って勝たねばならんと思った。

隣の人にちょっと見ておいてくれるよう頼んで、気分転換もかねて、自動販売機でコーヒーを買い、予めマークしていた他の台の出具合を見て回った。二台は良く出ていて第二杯目、一合程上下の皿一杯程、後二台は見切りをつけられてしまったらしく空いていた。

三日間六台とも最底でも箱三杯程は出ていたので、一度に三台も四台も締めるとは考えられんので、やけにならず手元を狂わさんように打っていったら出せると松ちゃんは思い、頑張る事に決めた。

悪戦苦闘の末、やっと大箱三杯出した時にはもう五時を過ぎていた。もうじき石やんも帰って来るやろう、帰ってきたら止めよう、三－六は入ってくれたかな、と思いながら打ち続けているうちに石やんは帰って来た。

「よーお！結構出たやないか、けどおまえの三－六はあかなんだ。九レースで裏で入った、惜しかったなあ」

「いやあ、かまへん元々あんたの金やったんやから俺の腹は痛まんが、あんたはどうやった？」

「六レースからやって七レース取っただけで後はパーや、出目の出方がややこしかったんで控え目にやったから五千円の負けで過んだのが救いや、おまえはいかんで良かったわ。予想した通りに選手は走ってくれなんだ」

「選手もその日その時の状態でやる気出したり出さなんだりするし、予想するんも難しいもんやなあ。俺もこれだけ出すのに結構難儀したもんやでえ。仕事以外で金儲けするのは難しいもんやなあ、もうこれ以上打っても出ないみたいやし止めようか」

「ああ、そうせ、七千円位はあるやろう」

石やんは箱をもう一つ持ってきて詰まってる玉を取出し二人して持って行って景品を貰い店を出て金に替えた。

「金も有る事やし、久し振りでもあるんでこれから新世界でも行ってすき焼でも食おうか」

「ああ、そりゃいいなあ、たまにはええもん食って体力つけておかにゃならんけんな、おまえはパチンコで儲かったんで割勘でいきたい所やけど、俺の方がまた余計持ってるから俺がおごるわ」

「いやあ、すまんなあ、あんたに今日は金使わす事になってしまって・・・」

「俺かてまたおまえに金借りたりおごって貰わにやならんかもしれんし、まあ持ちつ持たれつでいこうや」

二人は華やかな商店街を歩きながら話続けた。

「俺はパチンコ打ちながら考えたんだが、やっぱり年明けたら型枠入れの仕事を徹底して覚え、将来はずっと型枠大工でいこうかと真剣に考えたんやけど、あんたは何んまにどうするつもりや」

「俺はバクチであかなんたらずっと土方するつもりや。日当が安いが気楽なええ仕事やがな。そのかわりずっと独身でいかないかんやろうから、彼々は寂しい思いするかもしれんけど、それは覚悟の上や。もし四十までにパ

クチで場底一千万円手に入れとら、それを元手に所帯でも持って運転手の仕事でもするつもりやけど、五年やそこらで一千万円以上手にするのは無理かもしれんなあ」

「そうやーあんたは車いくらか運転出来るんやから免許取って運転手になった方がいいんや、そしたら所帯持ってちゃんとやっていけるが、別に所帯持つのに一千万も要らんやろう？」

「おまえの場合は百万も要らんかもしれんけど、俺の場合には色々事情もあり、百万やそこらじゃどうにもならんのや。まあいずれにせよ所帯持って子供が出来たら責任持って育てる事が肝心やなあ。その子が将来バラ色の人生を送るか灰色の人生を送るかは親の躾次第と言う事を何かで聞んだことがあるが、俺もその通りだと思うんや。恐らく筈や山谷とかで土方等を長くしている大方の者は悪い生い立ちの元で育ってきた人やと思うんや。そやけど大人になるまでの環境が悪かったんは宿命かもしれんし、またもうどうしようもない事なんやから諦めて誰も恨まず、分相応に下っぱの仕事でもかまわん、仕事してればいいんやという気持で生きていくのが無難やろう。けど、今の仕事にどうしても嫌気がしている者は、自分のやりたい事をやっていけるようそれなりに努力すれば、その努力の仕方によっちゃあ、自分の悪い宿命を退け、自分に合った幸運を迎え入れる事も出来るかもしれんけど、それはまた時でもあるはずや」

石やんの話が少々長びき脱線気味になったところで、目指す店に着いた。大きな店で店内は椅子席と座敷席に別れていた。

あいの日でもあり、すいている方だったので座敷席でゆっくりする事にした。松ちゃんはビール、石やんは酒を飲み、すき焼を四人前も平らげて相当良い気持になって別れる事にした。

「ほんならまた、正月に会おう。体が資本やけん体に気付けて元気にやれよお！」

「今日は有難う、正月は俺がおごるけん、いい正月しようーあんたも元気でなあー」

月並な別れの言葉だけど、冷さを突いて威勢良くあたりに響いた。

筈や山谷等、街に寄う底辺の地域には色んな生きざまがあるのである。松ちゃんや石やんは底辺での生活十年にもなり、その地域での生き方の要領も分りきた体も丈夫だから気楽な生き方をしている方だけど、惨めに生きている人も多いのである。

石やんは親方を持ち、殆んど直行で行ってるけど、直行で行けない大部分の者は不況のおりには朝五時頃に起

きて仕事を探さねばならないのである。

金はない、預定も受けられんという身で寝過ごしてあぶれたら、バンクにいって売血をするか、それも出来なければ日雇組合がやっている炊き出しに授かるしかない。どちらも駄目だったら大きな食堂の裏に回って炊事材料の残り物等を貰って自分で空地や公園等で自炊をし、ぞおかんをしなければならないのである。

釜ニュースで京屋のことを知らせてあるが、京屋あとは「手打うどん・そば」の看板を出している。まだたべてはみない。

踊子という店についてはまえに特集おかまでふれた。パチンコ屋のニュー大阪から東へ行き、旭町商店街へ入る手前で左に折れた路地にあった オカマサロンだ。

その踊子のママさんがくれ少し前から行方不明。そしてこのママさん、ママのくせにかみさんと子供もいたのだがやっぱり行方不明。

なんでも借金がふくらんでどうしようもなく消えたというが、ある人によればそれは五千八百万円とか。

あゆれなのは保証人のハンコをついた連中で、山王町ではクリーニング屋とうどんやがそのために店じまいした。

オカマがりみの話は深刻でもどこかユーモラスなものだけれど、このハナシはただただ深刻一方だ。